

P3-43.*マウス脈絡膜新生血管モデルに対する CD40 の関与**

(八王子・眼科)

○横井 克俊、奥貫 陽子

(眼科学)

馬詰和比古、服部 貴明、白井 嘉彦

山川 直之、竹内 大、後藤 浩

(順天堂大学・免疫)

秋葉 久弥

【目的】 脈絡膜新生血管 (CNV) 形成には VEGF のみならず、様々な免疫系の関与が示唆されている。CD40 はマクロファージや樹状細胞などの抗原提示細胞上に発現している分子であるが、脈絡膜新生血管誘導モデルにおいても CD40 の CNV 発現への関与について検討した。【方法】 C57BL/6J マウスに網膜光凝固を施行し、照射日より抗 CD40 刺激抗体 (CD40 群)、またはラット IgG (コントロール群) を 300 µg/日 を腹腔内へ隔日で投与した。レーザー照射後 1 週間後に左心室よりフルオレセイン標識デキストランを投与し眼球を摘出。ホルマリン固定後、脈絡膜フラットマウントを作成し、CNV 面積を比較検討した。また、C57BL/6J マウスに網膜光凝固を施行した群 (CNV 誘導群) と無処置群に分け 1 週間後に眼球摘出し、それぞれ real-time PCR にて CD40 mRNA を解析した。

【結果】 CNV 誘導群では無処置群と比較して有意に CD40 mRNA が高発現しており ($p=0.0433$)、CD40 群の CNV サイズ ($61,411.9 \pm 24,160.1$) は、コントロール群 ($45,791.7 \pm 25,640.9$) と比較して有意に大きかった ($p=0.0119$)。

【結論】 レーザー照射によって網膜で CD40 の発現が増強されたこと、また CD40 の刺激が CNV の形成に促進的に働いたことが明らかとなった。

脈絡膜新生血管誘導 CNV モデルにおいても、CD40 は血管新生に促進的な因子である。

本研究は平成 21 年度東京医科大学研究助成金の援助によって行われた。

P3-44.**東京医科大学形成外科での陰圧閉鎖療法を用いた治療経験**

(社会人大学院三年・形成外科学)

○宮地 有理

(形成外科学)

今井龍太郎、権東 容秀、松村 一

渡辺 克益

(湘南東部総合病院形成外科)

片山 公介

＜目的＞ 深達性潰瘍や瘻孔では壊死組織や感染を伴うことが多いため適切な創床管理 (wound bed preparation) を図るのが難しく治療に難渋することが多い。一つの治療法として持続的に陰圧を負荷することにより創傷治癒を促進する陰圧閉鎖療法 (negative pressure wound therapy、以下 NPWT) が開発された。当科でも深達性潰瘍、瘻孔に対して NPWT を行ってきたのでその症例をまとめ報告する。

＜方法＞ 2008 年 3 月から 2010 年 3 月までの 2 年間に他科入院中の患者に対し当科で NPWT を行った症例について検討した。形成外科では創傷治癒の促進目的以外にも NPWT を行うことがあり当科入院中の症例は除外した。

＜結果＞ NPWT を行ったのは 11 例であった。使用状況は 10 例が術後の創感染に起因する瘻孔で、1 例は術後のリンパ漏に起因する瘻孔であった。使用結果としては良好な肉芽形成、瘻孔縮小を認め、保存的療法に移行し得たのが 6 例、創面が良好な肉芽創となり植皮術をおこなったのが 1 例、発熱のため本療法を中断したのが 2 例、装置の詰まりのため本療法を中断したのが 1 例、その他の理由で中断したのが 1 例であった。

＜考察＞ 以前は瘻孔閉鎖のためにはデブリードマンを繰り返したり、皮弁を作成したりと外科的処置が必要であった。しかし、今回の方法では持続洗浄により感染をコントロールすると同時に吸引のスポンジによる壊死組織のデブリードマン、さらには創部の物理的な縮小効果により、多くは病棟での処置で閉鎖を行えるようになったと考える。一方で、本療法では創面の観察がしにくい為感染の拡大が気付きにくい。発熱により中止した症例もあり、療法